

研究開発の実際と成果

1 本年度の研究の重点

(1) 重点のキーワード

いかなる研究課題を持つにせよ、日々実践に当たる教師が目指すことは、現実の授業の改善を図り、目の前の児童を教育的に育むことだと考えた。これは、実践の原点でもあるが、同時に、研究の原点でもあると思われる。こうして、実践と研究の原点に回帰する形で、今年の研究の重点は、「授業改善」というふうに捉えた。

(2) 学年別部会と、学習分野別部会

研究組織としては、1～6年までの、学年別部会と、学習分野別部会がある。

学年別部会の場合、当然のことながら、各学年の発達の課題を生活や学習の面から洗い出して整理しなければならない。その場合の観点として、各学年とも、「公共性」という価値を掲げ、その面から、児童の生活や学習における成長を図ろうとした。学年部会で推し進めようとする授業改善も、その学年の「公共性」の成長を願ってのことである。もちろん、1～6年までの各学年は、発達段階も異なり、一様に「公共性」の伸長を意図しても、到達目標や手だては異なり、そこに学年部会としての特色も出て来るわけである。例えば、3年生では、2学期から、学級の担当が、音楽・アートを除く全ての学習分野を指導する形から、学習分野別の担当による学習指導が始まり、一種の学習の移行期に向けての対応がなされている。

学年別部会のほかに、学習分野別部会の研究組織がある。ここでは、専門分野の観点から、6年間の成長を念頭に置きながら、「公共性」の伸長を図ろうとしている。

もちろん、それぞれの学習分野で育もうとするものには、各々大きな違いがある。客観的な事実に基づいてなされる学習と、想像力や、その表現を目指した学習とでは、学習活動の様相も大いに異なり、児童の心の状態の違いも大きい。しかしながら、大勢の児童が互いに関わる学習活動であるから、そこには、算数なら算数なりの「公共性」に関わる課題が生じ、アートにはアートなりの「公共性」に関わる課題が生じるものと考え、それを6年間の成長の中で育もうとしているのである。

こうして、学年別部会と学習分野別部会の双方で「公共性」の伸長に向けた授業改善を目指しているのであるが、両者は互いに別個に活動しているのではない。学年別部会では、各学習分野を代表する担当者がおり、その学年の発達を踏まえた学習指導に力を注ごうとしている。また、学習分野別部会では、6年間の長期的スパンの上から、それぞれの学年で、「公共性」を育むために、分野別指導の中で力を入れなければならないことを割り出す。こうして、学年別部会と学習分野別部会は、相互補完的な関係にあると言える。

(3) 内容的なキーワード 「公共性」

それにしても、「公共性」は、学年別部会と学習分野別部会の双方を含むほど、大きなものなのだろうか。

「公共性」ということを掲げた我々は、「公共性」を、普遍的価値のように捉えている。子どもたちは、大勢の仲間や人々と関わりながら学び、くらしを共にする。そして、社会の一員としての資質を身につけて、やがては一人立ちを期待される。「公共性」は、すべて学年、学習分野に関わるものと考えられる。

一方では、授業改善は、日々の具体的な営みの集積とも言える。そして、その成果を世に問うのは、本校の公開研究会である。その中で、各学年別部会と学習分野別部会は、いかなる成果を確認し、新たな課題を意識したのだろうか。次の記録に、それを委ねたい。